日本人官僚とドイツ人舞姫の悲恋は実際に存在したのではあるまいか？

「石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。」（森鷗外『舞姫』より）

明治の文豪、森鷗外の短編小説『舞姫』は、学校の教科書にもたびたび登場する名作であるが、旧字旧仮名で書かれているため現代の読者にはいささか読みにくい。

監督の奥秀太郎は、原文の口語訳を底本とし、ストーリーに若干の編集を加えることで、画ニメ『舞姫』を誰もが楽しめる映像作品に仕上げた。奥監督は、普段読書に馴染みのない人にこそ観てほしいと強調する。難解なイメージから、古典小説の面白さを知らずに済ますのはもったいない、と。本棚の片隅で埃をかぶるままに置かれる多くの優れた古典作品は、現代にあっても人生の滋養となるものを与えてくれるのだから——。

そもそも『舞姫』とはどのような小説か？　主人公、太田豊太郎は東京大学法学部を19歳の若さで首席卒業。官僚となった後も、周囲の覚えめでたくドイツへの国費留学を命ぜられる筋金入りのエリートである。一方、作者の鷗外（本名・林太郎）も、19歳で東大医学部を卒業、陸軍の軍医となり3年後、豊太郎と同年でドイツへ国費留学することになる。

もちろん『舞姫』はフィクションである。だが鷗外のドイツ留学の経験、また帰国の際に鷗外を追って来日したエリーゼ・ヴィーゲルトなるドイツ人女性との間に存在したであろうロマンスが、『舞姫』の下敷きにある。

虚構のエリス・ワイゲルト（ヴィーゲルトの古表記）と現実のエリーゼ・ヴィーゲルトが、どこまで似ているかはわからない。結局エリーゼは鷗外の家族の説得によってドイツに帰国。鷗外は『舞姫』における豊太郎の悩みを、立身出世とエリスへの愛との板挟みに設定しているが、これも現実とさほど遠いことではあるまい。

豊太郎がエリスと肉体関係を持ったのは「私がこの上なく慕っている母の死」がきっかけだったと告白している。理由がどうあれ、豊太郎の行いはあまり褒められたことではない。だが、こうした愛の悲劇は——明治であれ現代であれ——いつの時代も繰り返されるのが常だ。

監督の奥秀太郎と作画の古屋あきさは、一組のカップルを繊細に描ききる。特に古屋の鉛筆画は豊太郎、エリスのナイーブを表現してあまりある。彼らの目や、指先にすら豊かな感情が見てとれるほどだ。

画ニメ『舞姫』は、鷗外の原文だけではともすれば感じそびれてしまいがちな、いつの時代にも通じる男と女の機微と、その懊悩を、現代に生きるわれわれにも親しみのある感情と地続きだということを示してくれる。

2人が最も力を入れたのがラストシーンの舞台だ。奥は「この瞬間のためにそれまでのストーリーがあった」とまで語り、それに応えた古屋の柔らかな筆致の美しさは、特筆に値する。